

# 「パネルディスカッション」

## 〈テーマ〉 — 古代社会と“まだら馬”そして、尾駁の牧へ —

◇パネラー：山口 博、松本 建速、進行役-相内会長、 ◇司 会：高澤 聡

高澤：それではお待たせいたしました。先ほど、午前中にご登壇頂いた山口先生を真中に、それから、右手には松本先生、そして当会会長の相内。この3名による「パネルディスカッション」を行います。なお、途中で、昨年も申し上げましたとおり、皆様からご質問を受付けたいと思いますが、本日のテーマの主題である、「尾駁の駒・牧」の背景を探る—といった内容に添った進行となります関係上、質問時間が若干(じゃっかん)少なくなることが考えられます。あらかじめご了承をお願いいたします。それでは、「パネルディスカッション」進行役の相内にマイクをお渡しいたします。相内会長、よろしくをお願いいたします。

相内：本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございました。私もこのテーマを追いかけるために研究会を発足…。まあ、その前からも細々と勉強をしてきたんですが…。なぜ斑なのか？、荒馬なのか？、そして、それがなぜ名馬なのか？ということは、実際のところは、平安時代にたくさん歌に詠われて来ているとは言いながらも、なぜなんだろうな？…と、常日頃から思っていたわけですが。昨年のフォーラムでも、なぜ斑なのか？ということ、この「パネルディスカッション」の席で問いかけ、終わってからも常に考えていました。そうした折に、山口先生のような方にお会いしたんですが、まさか、このような問いに答えてくれる研究者の方はいないのかなあ？と思っていた矢先でした…。どうも、この研究テーマを追いかけていますと、時と場所を得て、そういった方々との出会いがあるみたいに感じられます。

今日は本当に、山口先生のお話を聞いて確信させていただきました。なるほど、神聖性のある馬だったんだな…。昨年のフォーラムの「オープニングアクト」で『其駒』を披露していただいたんですが、その中に出て来る馬、“其駒”(そのこま)とは、“葦毛(あしげ)の駁(ぶち)の虎毛の駒”、駁馬だったんですね。斑(まだら)馬というのは、先ほどの先生のお話でご紹介されたように、たくさんあるんですね…。

今年の5月、東京で先生とお会いした後に、実は、昨年のフォーラム講師でもある、京都の上賀茂神社の権禰宜(ごんねぎ)の藤木保誠(やすまさ)氏にも、お礼方々ご挨拶に伺ったんですが、その際に、今年は、山口先生にこういうテーマのお話をしてもらいますよ！と話したら、大変興味深く関心を持って下さいました。その折に、やっぱり、藤木さんも言っておられたんですが、「いやあー、相内さん…」と。実は“白馬節会(あおうまのせちえ)”には葦毛の馬を使うんですが、皆、“葦毛には気をつけろよ”という打合せがあるとのことらしいんですね。それほど、癖のある馬らしいんですね。そして、藤木さんはその葦毛の馬というのは、どうも、実は駁馬じゃないかと考えているようなんですね。いやあー、その時は、今回の山口先生のお話の内容までは話はしてないんですが…。

昨年このフォーラムの「パネルディスカッション」の席でも、藤木さんは、「どうして、日本に駿馬が無くなってしまったのか…？」と問いかけていて、そのことも、今後の研究課題になるんじゃないかと話していましたが、どうも、葦毛の馬をかけ合せているうちに白い馬しか無くなってしまった…。その過程の中で、駿馬が無くなってしまったのじゃないかな？と考えるようになります。

それで、今日のお話の中で、“まだら”思想というものが、『宇津保物語』の頃まではあったが、『源氏物語』には全くそういった記載が無くなっていて、わからなくなってしまっていたのではないかと話されて、大変おもしろいなと思ったんですが、山口先生は長い間、『後撰集』や王朝歌人の研究をされて来たということなんですが、私は今後、今回のテーマを追いかけて来ると、次は、尾駁の駒に関わる「人」がテーマになって来るんじゃないかと考えているんですが…。

そこで、“三十六歌仙”の人たちが結構この陸奥国へも来て、馬を題材にした歌を残しているところから、例えば『宇津保物語』の作者に擬されている源順(みなのと したごう)も“三十六歌仙”の一人で、当代一流の学者だと思んですが、彼は『馬毛名歌合(うまのけなうたあわせ)』などを編集したり、日本最初の分類体辞典『倭名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)』を編纂(へんさん)して、その中で「斑馬」というものを取り上げているんですが、やっぱり当時の平安貴族の支配層の人たちの中には、こういった“まだら”思想というものを、根強く意識していたのでしょうか？

また、当地の「表館遺跡」出土で赤い筋の入っている石帯(白玉帯)をこのフォーラムのテーマに取り上げた時に、この会場にも来て居られますが、当フォーラム講師もつとめられた國學院大学講師の飯沼清子先生のお話の中で、“通天の帯”というお話をされたんですが、その石帯についている模様如何(いかん)によっては、“天に通ずる帯”であったと…。平安時代の人々はその模様を価値を見出し、そこに感じる精神性があった…と聞いたんですが、平安時代の人々だけでなく、現代の人にもそういったものがあるのかも知れませんが、そういった意識というものが、特にも平安時代の貴族・官人たちの間には濃かったのでしょうか？

例えば、藤原道長が『御堂関白記』(長和2年4月23条)に、上賀茂神社参詣の折に、「松尾社の神馬は、鹿毛の駁であった」と日記で述懐していますが、『御堂関白記全注釈』(山中裕編)においては、どうして、賀茂社に詣でている時に、突然、松尾社の神馬のことを気にしている記述が出て来るのかをいぶかしがっていますが、また、『小右記』(永延元年3月16条)に、藤原兼家が一条天皇が小さい時(7歳位の時)に、清涼殿において「駿馬」一疋を御馬御覧させている記載が見えるところからも、確実にそういった、“斑馬は聖獣”と言いますか、神様の乗り物、神様への捧げ物といった思想は、大方の認識だったのでしょうか？その辺について、もう一度、山口先生にお聞かせいただきたいんですが…。

山口：えー、講演で、自分が思っていることをぺらぺら話すのは非常に楽なんで、その後のシンポジウムで質問が出てきますとね、答えられないことがたくさんあるんですよ…。わからない部分が…。今のお話ですが、一体、平安時代の人々がどっから“まだら馬”の思想、これが聖獣であるという思想を見につけたか？ 知ったかということなんですね…。

これはね…。どうも、二つのルートがあると思うんですね…。

一つが、今日、私がしばしば取り上げました10世紀の『宇津保物語』ってのがありますでしょ。これは今、司会の相内さんが仰いましたように、『宇津保物語』の作者は『倭名抄』という百科事典を書き、それから『双六盤歌(すごろくばんうた)』であるとか『馬毛名歌合』とか、そういうの作っている源順(みなのと したごう)という人だろうと言われていたんです…。この人は、ものすごく漢文の知識があるんですよ…。それで、奈良・平安時代の知識の根源、海の向こうの知識というのは、何によるかと言うと、全部、日本に持ち込まれた中国の古典によるんですね…。ところが、中国の古典って言ってもものすごい量がありますでしょ。そんなものを全部読んで暇ないんですね。それで、ガイドブックがあるんです…。その一つが、今日の私の資料に名前だけは出しておきました。お手元にございましたらご覧になってください。5ページです。5ページの真中の「尾駁の馬はどこにいるの？」っていう項目で「中国」のところですね。中国の本の名前を出してありますが、これ、全部じゃなくて、これは比較的、日本人が読んだ可能性のある文献だけを、私は引っ張ってきたんです。これ以外にもあるんですよ…。この中でどれが一番、奈良・平安時代を通じて日本の知識人が一番、勉強していたか？ということなんです。

1番にあります、「駁馬国(はくばこく)は南海にあつて駁馬を輸出する」と書いてある『芸文類聚(げいもんるいじゅう)』ってのがありますでしょ。これなんです。これがネタなんです。『芸文類聚』っていうのは、例えば、馬ならば「馬」、梅ならば「梅」っていうふうに項目別にですね…。漢詩・漢文にはこんなに名句・名文があるぞ！というものを、たくさんの中国の古典から選んで、名文・名句を並べたんです。ですから、それを見ますとね、日本の歌人たちは勉強していて、例えば、馬というものを題材にして和歌を作るときには、まず、漢詩ではどういうふうに馬を詠んでいるか？、漢文ではどう書いているか？ってのを調べるんですね。その時のガイドブックはこの『芸文類聚』だったんです。『芸文類聚』は、奈良時代の知識人も平安知識人も、この程度の知識は持っていたという、一つのガイドラインを知ることになるんじゃないかと思うんですね…。そこには「駁馬国」も広く書いてあるわけですからね。そうすると、かなり知っていたに違いないというふうに想像するんですね…。その下の『太平御覧(たいへいぎょらん)』にいたしましても『冊府元龜(さつぷげんき)』も、それから『唐書』も、これは皆、平安の知識人たちが勉強している本なんです。ということで、書物によって知ったというのが一つあるんですね。

それから、もう一つが問題なんで…。文化の伝播というのは書かれたもの以外に入って来るんです。「神話」なんてまさにそうですね…。海の向こうの「神話」がどれくらい入って来たか？ 先ほど話をいたしました、スサノオが馬の皮を剥(は)いで日神アマテラスに投げつけた話なんて、犠牲馬を太陽神に捧げるというオリエント神話・思想の伝来です。それが入って来たということは、誰かがそれを運んで来たんですよ…。誰かが…。誰かが、何かの形で運んで来たものが定着したんですね…。この“まだら馬”の思想っていうのもそれで、その思想が誰かによって運ばれて入って来ていたんだろう…と。

それならば、どこに入って来たか？という、どうも、陸奥(みちのく)以外は考えられないんですよ…。これは…。そうすると、やはり、陸奥(みちのく)の方だと、北の方にあると…。

松本先生の解説を聞きましたら、土地の自然環境などを見ておきますと、やはり南方系とか北方系とかのように、渡航してくるわけですよ…。そうすると、北回りでもって、この思想が入って来ていたんじゃないだろうか？…と。思想が入るってことは人が来たことですよ…。文献による知識と、文化の伝播ということも考えて行かなければいけないかと思うんです…。そういうことで、よろしいですか？

相内：はい。ありがとうございます。本当に傾聴すべきお話、本当に今日は、聞けて良かったなあとお大変うれしく思っております。

それからですね。次に、松本先生にお聞きしたいんですが…。これもですね…。去年のフォーラムの時に、私自身がその場で、直接、松本先生にお聞きしたかった質問なんですが…。

一応、先生の説で言う、信州・関東の馬飼の人たちが、系統として六ヶ所につながってるんじゃないかな？というお話を聞いた中でですね…。以前に、特に秋田・米代川流域や青森県南にも残っている「蒼前(そうぜん)信仰」の伝わり方について、先生に質問した時にですね、二つの資料をご紹介しますでしたね…。

一つは、根岸謙之助氏の「蒼前様は東北・関東・中部で祭られていた…」(1982『群馬大学医療短期大学紀要』3号「群馬県に於ける民間医療の研究 家畜医療の方法」)という、そういうつながりがある…と。その時の先生のお話では、これは方言圏論と同じで、文化のスタートしたところから遠いところほど遅くまで残り、スタート地点においては新しい文化が入りやすいので、新しい文化に上書きされてしまう…と。結果として「最初のものは廃れてしまう…」というようなことだったと思うんですが…。

もう一つの資料は、これもインターネットでも検索できるということでご紹介くださったんですが、長野県の『米澤村村史』に「茅野市湖東の新井駒形社は、現在では駒形神社とされているが、明治までは“ソウデン様”であった」ということ等、そういう資料に目を通した時にですね、実は大変おもしろいな…！と思ったことがあったんです。

それは、去年もこのパネルディスカッションの席でお話したんですが、やはり信州も馬飼地域ですので、そこに駒形神社がある…。また、その先の資料の中には、「ほっち(発地)がさわ・はなまき(花牧)原・野馬取(速)沢・市在など、牧にゆかりある地名に囲まれたこの地に、駒形社があるのは偶然ではないだろう」とあったんですが、特に、この「ほっち(発地)がさわ」というのがおもしろいなと思ひまして…。

「発地とは、貢馬の馬を集めて京都に向かう出発点の地名であるといわれる」(『南大塩の歩み』)と資料に出てくるんですが、こういったことを考えますと、先ほどの…。まだ、あくまでも予測でしかないんですが、当地の発茶沢…。なぜ「発茶沢」なんだろうか？これは、なぜ「尾駁の牧」なのか？ということと、同じ理屈になっちゃいそうですが、やはり、今日の山口先生のお話じゃないですけども、西から朝鮮半島をまわって日本に入って来て、さらに信州・関東地方を経た古墳文化を伴う馬飼文化の人たちの系統が、自然と当地にも入って来た時に、私は、そういう人たちの自負心から、当地にも「発茶沢」と名づけたんじゃないだろうか…？と予想しているんですが…。一つ、この予想について松本先生はどう思われるか？是非お聞きかせいただきたいんですが…。答えられないと言われれば、それまでなん

ですが…。(苦笑)

松本：お答えできないんですけども、おもしろいですから、どうぞ続けて下さい。もっともっと広く、継続して考えて頂ければ、何か、答えにつながるものが出て来るんじゃないかと思えます。おもしろいです…。「発茶沢…」、「ほっち(発地)」ですね…。一緒に考えて見たいですね。

相内：それとですね…。レジュメづくり、資料集めしていた時に、先生が仰っていたんですが、「表館遺跡」に製塩土器があるのが良いと言っていたんですが、その点について、少し詳しくお聞かせいただきたいんですが…。

松本：それについてはですね、まだ、全然詳しいことは考えていないんです…。ただ、馬を飼う場合には塩が必要ですから、それで、陸奥湾沿岸というのも、縄文時代もそうでしたけれども、平安時代も塩の産地ですから、その内の一つとして「表館遺跡」もいうことができるんだなあということで、是非、「表館遺跡」の製塩土器を展示してほしいと言っていたんです。

馬飼いを支える生業の一つとして、製塩というのをもっと考えていかなければいけないと思っておりますから、ただ残念ながら、六ヶ所村内の資料を使って、私が詳しく製塩について研究しているわけではありませんので、これは今後、私も含めまして、地域の方々に研究していただきたいなと思っていることの一つです。

相内：ありがとうございます。

では、更に質問を続けさせていただきますが、前に、山口先生と、今回のお仕事をお引き受けいただくにあたって、いろいろとお話をさせていただいたんですが、その中で、私もいろいろと勉強させていただいたんですが、古代・秋田城跡と払田柵(ほったのさく)跡で、実は、白黒の斑の絵馬が見つかっているということが分かったんですが、まあ、これもインターネットで調べたんですが、秋田県埋蔵文化財センターのホームページに載っておりました。

それで、こういったことが分かってくると、それはもう十分に、北の官人の間にも聖獣思想というものが認識されていたんだということによろしいのでしょうか？その辺について、もう少しお話をお聞かせいただきたいんですが…。

山口：おそらく、そういう思想を、すべての者が認識していたかどうか分かりませんがね。やはり知識人たちはその思想を持っていたと思うんですね。これは…。そうしませんと、斑の馬であるとか、斑の動物の崇拝とかあり得ませんからね。持っていたと思うんですね。

ついでに、ちょっとよろしいですか？それで、松本先生のお話を聞きながら、さらに私は、先生の資料の…22 ページ。先生の今日のお話と直接関係ないので、お尋ねするのは失礼かと思うんですが…。22 ページの右下の方に、錫杖状鉄製品がたくさん出てますね。これ、大きさを図っておりますと、だいたい5…、10…、20センチくらいになります？それで、上を見ますと、何かこう、上が曲がってますでしょ？これ、触角状の青銅剣と非常によく似ている

んですよね。上の方の右のところにツノが付いているのは、これ触覚ですよね。触覚状青銅器と言いまして、別名「アキナケス型剣」と言ってるんです。

これ、なぜか？と言いますとね…。「アキナケス」っていうのは、「スキタイ」ってことなんです。「スキタイ」っていうのは、西暦前くらいに、一番最初にユーラシア大陸を西から東へ、また逆に横断して行った遊牧騎馬民族なんです。スキタイって民族は…。その民族が使っていた青銅剣が、これと非常によく似ていて、先生のお話を聞きながら、実は「これ！」って、驚いてしましましてね…。こんなのが出ていたのか！…と。

ということになりますと、その馬を使っていた「スキタイ」。これが、どんな思想をもっていたか？ということは記録になかなか出て来ないんですけどね。その「スキタイ」が使っていた剣と同じものが、ここに出て来ているということ…。それならば、「スキタイ」とこちらとをどうやって結び付けるか？というと、実は西暦以前あたりに活躍していた「スキタイ」の民族がですね…。消えてしまって、かろうじて残って、やがて力を持ったのが「肅慎(しゅくしん)」という民族だと、こういう説を中国の研究者が出しているんですね…。何か、中国語の発音によりますと、「スキタイ」っていうのを発音している内に「肅慎」になっ行くんだと…。そうすると、西暦頃に活躍した遊牧民族「スキタイ」が後に「肅慎」になったということになりますと、「肅慎」は日本列島に渡って来たりしていますからね。そうすると、そういう関係でこれを考えたらおもしろいなあ～という、実はこれは全くの空想ですよ。そう、思って聞いていたんですね…。

ですから、先ほどの松本先生のお話を聞いて、「考古学ってのはうらやましいなあ～」と思いましてね…。あれだけデータを重ねますと、皆、本当だと思うでしょ。確かに全部が…。それに対しまして、私のやっている神話だとか心というのは、まるで点なんですよね。点を並べるだけですから、なかなか信用してもらえないんですよ。私も考古学をやったら…と思っているんですが、それで、かろうじてその点を拾っていくと、今のようなところにつながる…とですね。何かまた別な世界が、その…見えてきます。「スキタイ」の民は馬を使っていた…。また、「肅慎」という民族も馬を使っていて、これを宝物としていた…。その「肅慎」が日本列島に渡って来ている形跡がある…と思える。そして、偶然ここにですね、「スキタイ」が使っていたアキナケス型の短剣に非常によく似たものが出てきている…というのは、私にとって非常に大きな喜びであって、これは松本先生に感謝しなければいけないと思うんですね。そういうことです。

相内：ありがとうございました。

松本先生、この錫杖状鉄製品は、県内のいろんなところ出てるんじゃないですかね？ 六ヶ所に限りませんよね…。

松本：そうですね。

相内：前にですね。北朝鮮から逃れた脱北者が日本海を渡って、津軽地域に漂着したということがあったんですが、当然、古代にもそういう人の流れというものもあったと思うんですが、それ

です。それに関連して、馬がですね、舟に乗ってどこから来たか？ 当然、朝鮮半島を経ていると思うんですが、それがこの地に来るルートは、やはりあくまでも大阪の河内のあたりを経て、そして信州に入って…という感じになるのでしょうか？ その辺について、松本先生はどう思われますか？

松本：私はですね…。山口先生には申し訳ないんですけども、大陸から直接来ているというよりは、信州あたりを経由していると思っています。今日は何度も、信州・上州、群馬県の話をしてきましたが、信州には直接朝鮮半島から来てますよ…と。朝鮮半島から信州に入る。そこで100年ぐらい居ると思うんです。そこで変容して、日本化して、それが東北に来ていると…。そして、その東北への入り方が、7世紀に直接入る人たちも居れば、「角館」だとか「花輪」だとか、あの辺で数世代を置いてから六ヶ所に入る…。そういう変容を経て来ているかなあ…とされているので、大陸から直接来るといえるのは無いのではないかなあ…と。考古遺物からそう考えているんです。

この錫杖状鉄製品に関してはですね…。残念ながら、申し訳ないんですけど、私、ちゃんと自分では研究してないんで、たまたま、この「弥栄平遺跡」の特徴的な遺物として載せただけなんです…。まあ、これは要するに、相内さんがですね…。以前、ご職業柄興味を持っておられたのを知っていたので、それで、載せておいたというところがあるんですが…。どうですか？ 相内さん、少し考えるところがおありですか？ どうぞ…。

相内：以前、私も、先生が仰る通り、そういうものを持つ人たちというのはどういう人たちだったのかなあ？というので、興味があって、以前、質問したことがあったんですが、その後、残念ながら研究してないんです。

松本：じゃあ、その後、それを深めたわけではなかったんですね…。失礼いたしました。

ここにもですね、茨城県のものとか鹿角のものをちょっと、下段に載せておきましたが、一番右側のものが、これ青森県のもので、津軽半島東海岸、青森市の北隣にある、蓬田(よもぎだ)村のもので、真中のものが鹿角市のもの。それから、一番左手のものが茨城県石岡市のものです。で、東日本の山岳信仰と言いますか、修験道の方が使ったのか？、あるいは日光の…、えー、ちょっと忘れましたが(補足：男体山頂遺跡)、やはり修験関係の遺跡から出ているのがあります。なので、そういう文献をちょっと読んだことがありますけれども、大陸との関係では、以前、石川県の埋文センターにいらっしゃった小嶋芳孝さん(補足：現金沢学院大学)が「北回り」、沿海州由来を考えていらっしゃいますね…。が、私自身は、実はまだ、これについては自分で研究していないもんですから、何もお答えできないもんで、申し訳ありません。

相内：どうも、ありがとうございました。えー、ちょっと、時間の配分を考えますと、皆さん方にも質問していただきたいので、今後のフォーラムの進め方、研究テーマの展望についての予測を述べて、会場の皆さんにマイクを回したいと思います。

今日のお話を聞きますと、やっぱりそういった思想を持った人たちが…。要するに、何を言いたいかと言いますと、平安時代の中期から後期にかけてですね…。(藤原)道長の政権時には陸奥交易馬が20疋、息子の頼通の時代には30疋になっていて、確実にきちんと交易貢馬が行われています。5年に一回の陸奥守の任期中にですね…。ということは、しっかりしたシステムがあったんだろうと、私は思うんです。

そうした中で、今日の松本先生のお話ではないですが、なぜ、そういった馬飼の人たちがこの地に来たんだろうか？また、先生曰く、“私牧”であった方が都合がよかったのではないかというお話でしたが、その背後関係、そういう人たちについてちょっと考えた時にですね…。実はですね、この時期に、実力の大大物国司の藤原実方(さねかた)という高級官僚が陸奥守になっているんですね…。この人は、一昨年(2019年)のフォーラムで、講師の倉本一宏先生もご紹介した『権記(ごんき)』で有名な藤原行成という人と、一条天皇の前でいさかいを起こして陸奥国へ左遷されたと言われてる人なんですけど、ところが、どうも左遷ではなくて、最近の学説では、摂関家の小一条家の財政基盤を担うために陸奥守になったという説もあり、まあ最後は、陸奥国で亡くなっているんですけど…。その際、彼の従者として付き従って来たのも源重之(みなもとのしげゆき)という人なんですけど、彼は、相模権守(さがみごんのかみ)を皮切りに、信濃守(しなのかみ)、日向守(ひゅうがのかみ)などの馬どころの地方官に任ぜられていて、彼もこの陸奥国で亡くなっています。

こういったことを考えますと、彼らは共に“三十六歌仙”の一人でもあるところから、今日のお話からすれば、歌人同士の間人間関係を考えれば、充分“まだら思想”を踏まえていた可能性があり、そうすれば、果たして尾駮の駒や牧との関わり合いというのは、一体どうだったのかなあ…？と、非常に興味がありまして…。また、この点について、山口先生に再登壇頂いて、そういった陸奥国へ来た歌人同士の間人間関係を含めて、陸奥国の馬についてのお話をお聞かせいただかなければならないんじゃないかと思ってる次第です。

それと実はこれも、最近お話を伺っている京都大学の先生に聞いたお話ですが、陸奥国の「奥地」々々と言ってますが、この古代に使っている陸奥国の「奥地」という言葉は、俗にいう“山の奥地”という意味ではなくて、これは『続日本紀』に出てくるんですけど、実はこれは、中国に無い言葉じゃないか？…と。そして、この「奥地」は津軽地域を指しているのではなくて、あくまでも下北・上北・三八地域を指している、日本で造られた言葉ではないか？ということを発表しているんです。

また、先ほども申しましたとおり、この馬飼の国の守となった藤原実方も、左遷されたと言ってますが、実際は“罷申(まかりもうし)”とあって、きちんと地方に任ずるにあたって天皇への暇乞(いとまご)いの儀式を行って任地に送り出されていることを考えますと、これも最近の文学的研究成果において分かってきたことらしいですが…。そういったように、今後はもう少し、陸奥国の人間関係も考えながら、尾駮の牧に迫っていけたらなあ…と思っっています。そういうテーマのフォーラムがありましたら、是非ともまた、足をお運び頂ければと存じます。それでは、会場の皆さんに質問のマイクをお渡ししたいと思います。



高澤：それでは、会場の皆様から、今日のご講演の趣旨に関しましてのご質問、疑問等を賜わりたいと思います。お在りの方は挙手をお願いいたします。マイクを持って伺います。何かございませんでしょうか？ 遠慮なく、どうぞ。

### 〈会場からの質問〉

栗村：〔当研究会顧問〕えーと、二つほど。一つは松本先生に。

信州とのつながりを考えておられる…。私も、非常に引っかけがありまして、八戸市の「杏葉(ぎょうよう)」ですね。あれを見て、長野県佐久市の「東一本柳古墳群」から類似のものが出土しているというので、現地に足を運んで遺物を見せていただきました。驚きました。頭部のところが、東一本柳のものは蝶番(ちょうつがい)になっていて、八戸のものは平であるという違いはありますが、形態、線刻による紋様等酷似(こくじ)しており、非常に共通性があります。古墳の築かれた年代も同じ頃であるというのが理解できます。いずれの土地も馬産地です。

また、時代は下がりますが、南北朝時代頃からこの地に勢力を伸ばした南部氏が馬産に力を入れておりますが、もともと南部氏は甲斐の国(山梨県)南部、身延の地で馬産に関わった一族です。そこにも共通性が見られます。杏葉の他に共通性があるものについて、お話していただければと思います。

それと、山口先生のレジュメに「まだら馬」の種類が10種類ぐらい載せてありますが、気がついたことがありますので、質問になるかどうか分かりませんがお話しします。

私が前に勤務していた八戸市博物館に、『百馬の図』という上下二巻の巻物があります。馬の絵が100態描かれています。体毛が細かく、特色ある体毛が区別されて生き生きと描かれています。そして「馬」ごとに、山口先生のレジュメに書かれてあるような難しい馬の名称がそこに書かれています。

この『百馬の図』の著者は黒沢定幸、黒沢弘忠という兄弟です。弘忠は“石斎(せきさい)”と号して、林羅山(はやし らざん)の弟子で松江藩(島根県)の儒者として知られています。この二人が画工に依頼して作成させたものです。製作年代はこの巻物に序文が寄せられていることから、正保4年(1647)に完成され、当時の盛岡藩主-南部重直公に献上されたものだと思います。博物館にこれを寄贈されたのは、寛文4年(1664)に新たに創設された八戸二万国の藩主のご子孫の方です。

たぶん、八戸藩主2代-直政公の後嗣(こうし)に盛岡藩29代-重信公の四男-通信公が入りましたので、その際通信公が八戸入部の折に持参したものだと思います。ちなみに、通信公は盛岡在住時分から馬術の修練に励んでおり、“徒鞍流(すぐらりゅう)”馬術の道統者となるほど馬術にすぐれていたと言われていました。馬術に関する書き物も残されていますので、これも盛岡藩から八戸藩に伝わったのは間違いないと思われます。

さて、その序文を書いたのは誰か？ 東京大学の和泉新(いずみ あらた)先生がその序文を解説されておられますが、黒沢兄弟の師である林羅山であることが分かりました。

その序文の中に、『六経(りくけい)』…。この中に『易経(えききょう)』『書経(しょきょう)』

『詩経(しきょう)』などがありますが、『爾雅(じが)』『説文(せつもん)』『相馬之書(そうまのしょ)』〔馬の良否を見分ける技術書〕『書経』の魯頌、駒篇の書名が書かれてあります。中国の馬に関する古典のほとんどを紹介しております。山口先生のレジュメの冒頭に「斑馬は100種類に分類できる」とか「駁馬は総称と思えばいい…」と書かれ、「駁(はく)」「驄(すう)」等という名称を挙げておられます。

『百馬の図』の序文の中にも「夫れ馬の名多きや、六経に見え、爾雅に釈、説文に解し、相馬の書に記し、歴代の諸籍に載す。なかんづく魯頌の駒篇に十有六の名を挙ぐ。その余の駉、鶉〔※つくりが鳥ではなく馬になる漢字〕、駟、駟…白駒の類、歌詠に入る者少なからず。大底毛色を以て之が号と為す。五色の正と間に純の者有り、雑の者有り、浅深の者有り、星天の者有り…」〔和泉新先生解説〕と書かれてあり、体毛の状態がつけられ、分類されていることが分かります。

先生のお話で『百馬の図』をよく理解できたように思います。質問でなくて申し訳ありませんでした。ありがとうございました。

相内：それでは、松本先生、先ほどの質問について、よろしくお願いたします。

松本：信州と関連のある、他のものはあるか？という感じですかね？ それでよろしいですか？

確かに仰られたように、「杏葉」ですね、信州やあるいは山梨県から類例が、「鹿島沢古墳群」のものに本当に似ている杏葉が出てますね（補足：長野県佐久市東一本柳古墳、山梨県笛吹市御崎古墳）。私もそっくりだなあと見て見ました。

他にもですね。今日、ちょっとお見せしましたけど、「石組のカマド」であるとか、あるいは「杯(つき)」ですね。内黒の杯。東北の杯っていうのは最初から内黒のようですけども…。とはいっても、もっと古くから出てきたのは長野県域なんですね。信州では5世紀の後葉には皆、内黒なんですね。それがどうも、内黒の杯がですね…。しかも表面も削りじゃなくて磨(みが)きなんです。これ、東北北部と一緒にです。岩手県だと、岩手県内よりも南は、宮城県だとか福島県は皆んな削りです。杯の外側というのは削っています。それが、東北北部になると磨いています。杯の外側を磨き、内側を黒くするというのは、信州では5世紀の後葉には、すでにみんなそうなっているんです。それが、福島県の浜通り・中通りには伝わってないんです。で、会津ですね…。会津側に山を通過して、会津には伝わっています。そして、会津方面から東北北部に来ているんじゃないのかなあ〜と、実は、私は思っているんですが…。その杯の内黒処理と、それから外側を磨くということからですね…。

それから他には、末期古墳のつくり方ですね…。信州のものっていうのは、ご存知のように「積み石塚」がたくさんあるわけですけども、その「積み石塚」の系統として、東北北部の末期古墳を捉えるべきなんではないのかなあ…というのが、私の考えているところなんです。

岩手県のちょうど真ん中辺の北上市の「猫谷地遺跡」ですとか、あそこら辺のものは、長野県の方は「積み石塚」と言っている方もいらっしゃるくらい似ているんですけども、また、それをさらに変形させたのが、東北北部の末期古墳ではないのかなあ〜と思っているんです。

ただ、ぼぼ同時に入って来ますから、それは、どこかでワンクッションおいて変化して行くんじゃないかと、東北へ来た人たちがたまたま符合して、関東と合体したようなですね、石をあまり使わないものを造った…。ということなんじゃないかな…。その構造からいきますと、いきなり地下に主体を造りますよね、横からくり抜いて主体を造る…。横穴式の石室なんかとは全然違うので、古墳じゃないんだとよく言われますけども、ですけども、「積み石塚」自体、信州の「積み石塚」の中には地表面から竪穴を掘って主体部としてそして石を組むものがありますので、それが土になったものが、東北北部の末期古墳だなあ〜と書いておられて、それも信州とのつながりで考えられるのではないかと書いているところなんです。

高澤：松本先生、ありがとうございました。

続いて、ご質問ありませんでしょうか？ 私のようなド素人の視点からのご質問、大歓迎でございますので、どうぞ、この機会に挙手をお願いいたします。

齊藤：青森市から参りました齊藤と申します。「青森県文化財保護協会」というプロとアマの会がありまして、私もその会員なんですけど、昨年までその会長をやっていた盛田稔会長が仰るお話と今日の山口先生のお話がとてもぴたりするところがありまして、少し、出しやばらせていただきました。講演の中の無形の文化の伝来とか、それから“草原のシルクロード”という言葉、とても印象的でした。それで、盛田稔という会長は90歳をとうに過ぎた方です、名家の出です、東大を出て後、天皇をお守りする近衛兵になって、その後、まだお若かったので太平洋戦争の時にも残って、捕虜になったようでございます。

その時の経験で、いつも仰ることは、馬を筏(いかだ)に組んだ上に載せて、海のように広い荒々しい海原のような中国の洞庭湖を渡したと、よくお話をされるんです。本当に馬の好きな方で、また、南部馬にはサラブレッドの血が入っているというのが持論でした。それで、こちらの方はご存知のとおり、”ヤマセ”という季節風が強いので、潮風が塩気を運んでそれが牧草の成分になって良馬が育つとか、また先ほどの塩、製塩についてのお話が出てましたけど…。そういう前会長のお話が、今日の山口・松本先生のお話と重なるなあ〜と書いておりました。以上です。

高澤：では、山口先生、コメントがございましたら、お願いいたします。

山口：ありがとうございます。ユーラシア大陸のように地続きですと、馬を運ぶのはちっとも問題無いんですよ…。これは簡単なんです。一番問題なのは、海があった場合どうするか？ということ…。西の方の国ですと、地中海がありますでしょ。地中海で馬を運んでいる壁画が残っているんですよ。ギリシャ時代のが残っておりまして、ちゃんと舟に馬を載せて渡っているんですよ…。そうしますとね、その当時の日本列島に来た馬がどんな形であったか？全く私、分からないもんですから、お答えのしようがないんですけど、よく筏に載せて…、っという話もありますよね。しかし筏じゃなくて、すでに縄文時代にはかなりの舟があって、

どのくらいの航海力があつたかというのと、三万年くらい前ですか？ あれは、伊豆半島の南の方にある島で黒曜石(こくようせき)が採れましてね…。光っている石ですね。その黒曜石が日本全体に散っているんですよ。そうすると、日本中すでに、かなり離れている島から、伊豆半島に渡るということを頻繁(ひんぱん)に繰り返していることが分かっているんですよ…。そうすると、どうも、縄文人のその能力というのは、私たちの想像する以上に航海の知識があつたんじゃないかな？…と。

それともう一つ、北の方、アムール川を下ってくる民族というのは、皆、その上手に舟を使っています。というのを考えると、上手に馬を船に載せて運ぶぐらいの能力は持っていたんじゃないかなと思うんですね…。それならば、どんな民族がここに来たかと言うと、九州の…、九州にいろんな絵を描いた古墳が残ってますでしょ。その中にですね、馬が描いてあってその下に舟が書いてあって、そして、そこで人物が牽いている絵が残っているんですよ…。「竹原古墳」ですよ。その人物はこれはもう漢民族じゃなくて、これは完全に北方民族で、ズボンを履いていて、長靴を履いていて、着ている物もですね、漢民族と違って、つまり北方の民族が馬を連れて、その下に舟が描いてあると…。というのがありますんでね…。もうこれは古墳時代ですから、もっと前から、馬を上手に日本列島に連れて来ていたんじゃないか？と想像するわけなんですね…。そんなお答えでよろしいですか。

高澤：興味深いご質問、そして、ご回答ありがとうございました。後、もう一方からいただきたいと思いますが、いかがでしょうか？

沼尾：〔一般参加者〕地名に関わることを二件ばかり、お尋ねいたします。

確か、会長さんの資料だったと思うんですけども、2～3年前に、「“尾駁”という地名は北関東にある…」というような資料が、私の手元にあるような気がするんですけども、先ほどからの話ですと、六ヶ所以外に見当たらないということですが…。

それからもう一つですね、もう一点は、「蒼前」という名前の由来を初めて深く教えていただきましたけれども、たぶん、郡内にもですね、「蒼前神社」と言うんですか？「蒼前」という集落があるかと思うんですけども、何か記憶としては、「蒼前神社」というのがあるような気がするんですが…。それについて、馬産との関わりなんかについて、もし資料とかがあるのであれば教えて頂きたいんですが…。

高澤：ありがとうございます。それでは、地名に関するお答えということで、お願いいたします。

相内：たぶん、それは、松本先生が言っていたとおり、文字通りの「尾駁」という地名はここにしかないということでしょうが、先ほどのお話の中にもあったとおり、「小淵沢」とかということについては、今後の更なる研究が必要でしょうね…。

それと「蒼前」の論考については、当会のもう一人の顧問の伊藤一允(かずみち)先生が、当地の馬産地との関わりについての研究論考がありますので、また後で、沼尾さんにお渡ししたいと思います。

ただ今日、お話した中であつたように、「蒼前」信仰については、こちらの地域だけのものではなくて、元々本来、日本の馬飼地域にあつたものだと松本先生にご指摘頂いたとおり、私もそうなんだろうなと思っているんですが、結果として、最初の方が廃れて、後世まで馬産地として名高つた当地域に残つたということだろうと思います。後で、沼尾さんには、伊藤一允先生の論考と松本先生からいただいた資料をお渡しいたしますので、どうぞ、勉強してみてください。よろしく願いいたします。

高澤：それでは、これで、会場からのご質問は終了させていただきます。最後に、先生方から一言ずつお言葉をお願いいたします。

山口：「まだら」についての解釈…。多くの方々が、この「尾駁の牧」の会に入って考えてきたと思うんですね…。私は冗談半分に、自分の顔のアザとか何かを喩えにして問題にたどり着いたと言いましたけどね、問題はこっから先なんです…。

実はですね…。日本史を見ていても、外国の神話でもですね、異常に、異常に…、異状な神様ばかり登場するんです。文字の使い方がわかりますか？「異常に、異状な神様」が登場するんです。たとえば、誰でしょうか…？ 神話の世界で言いますとね、「アマテラス」。弟と言われている「スサノオ」。それともう一人、「蛭子(ひるこ)」っていう神様が生まれたのをご存知ですか？ これは、足が立たなくて流されちゃったんです。

それから、神話の中で、目が一つの神が登場しますでしょ。「目一箇神」です。それから、出雲(いずも)国をつくつた神様には「オオクニヌシ」と並んで「スクナヒコナ」の神っていますでしょ、これ身体が小さいんですよ…。う〜んと。そして、その神様と一緒にいろいろな知識を与えたのが「クエヒコ」って神様がいて、これカカシなんです。歩けないんですよ…。というのを読んでますと、神話の世界には、異状な神様が非常にたくさん登場するんです。これ、日本だけじゃないんですよ…。外国でも、みんなそうなんですよ。世界の神話のルーツになっているのが北欧神話ですけどね。北欧神話の主人公オーディンという神様、目が一つなんです。そして、身体にキズを持っているんです。そして乗っている馬が、これは、私、まだらだったら喜んだんですが、まだらじゃなくて足が八本あつたんです。そうすると、身体が異状な神様が異状な馬に乗って活躍をしている…。これが神話の主人公であつて、日本神話もみんなそうなんですよ。ということで、私は何か、神話の世界の主人公というのは、欠けている。どっかがその…、普通の人から見れば欠けている…。“欠けた英雄”という言葉は無いんですけどね、“欠けた英雄”ということがあるんだなあ〜と思って、そして、ふと思いついたのがこの“まだら”だったんです。“まだら”だつていうことをわざわざ表現したのは、やはり並ではないんですよ…。つまり、あるところの皮膚が、欠けた表現を持っている動物、そうすると、一方には、欠けた英雄の系列があり、一方には、欠けた動物の系列があり、その中に“尾駁の駒”が入るんですよ…。一体、人間にとって、“欠けた”ということはどういうことなのか？

今、現代になってようやく、身体の不自由な人を非常に大切に生きて共に行くようになりましたですよ。オリンピックにおきまして、パラリンピックがありますから…。しかし、

以前はどうだったですか？ こうやって押し込めていたでしょ…。こうやって。しかし、神話ではそうではなかったんですよ。能力の、全体的に欠けた人こそが、本物の能力を持っている…。なるほど、芸術の世界を見ますと、お琴の名人、宮城道雄は視覚に障害がありましたよね。ベートーベンも晩年には耳が聞こえませんでしたですよ…。そういう人こそが異常な能力を持っていて、尊敬しなければならない…。という思想があったんです。

それが古代においては、非常に擁護されていた…。考えて見ますと、神話を伝えたのは誰かと言うと、智識は豊富だけれども体力的に衰えた老人であったり、視覚の障害者たちであったかもしれない。平家節を伝えた者はみんなそうですよね…。目の見えない琵琶法師でしょ。昔は、そういうふうな欠けたところを持つ者に対する尊敬の念が非常に強かったということで、私は「尾駁の駒」もですね、講義をたどって行きますと、その“欠けている”という、そういうことに行きつく気がするんですね…。

“欠けている”。それは英雄の話になり、一方には動物の話になり、その中に“まだら”の話が出てきて、その中に「まだらの駒」が出て来るんだと…。いうことで、私は、「まだらの駒」だけを問題にしているんじゃないかなって、ここまで広めて考えて、初めて、これが現代に生きる学問じゃないかなあ～って、感じがしてくるんですよ。この頃、文科省が、「人文系の学問は要らないかな？」とよく言ってますでしょ、それを進めていきますとね、こういう発想は出て来ないんですよ。「まだらの駒」の奥には、これから、いわゆる身体に障害を持っている人に対して、どうしたら良いかってという問題がひそんでおり、私たちはそれを見極めなければならない…。それは、人文学ということの成果だろうなということ、やや我田引水の話になりましたけども、そういうことを思ってますね、今日はそこまで、細かく話しようと思っていたんですけど、たぶん時間が無いだろうなと…。その内また、相内さんから声がかかったならば、今度はその“欠けた英雄”なんていうところで、大きく話をしてみようかなと思っているところですね。そういうことです。

(会場、大拍手)

高澤：以上をもちまして、「パネルディスカッション」を終了いたします。ご登壇の皆様、ありがとうございました。